

令和 5 年 4 月 23 日現在

機関番号：13201

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K21955

研究課題名（和文）名詞性から見る日本語接続形式の歴史的研究

研究課題名（英文）Historical Study of Japanese Conjunctive Forms from the Viewpoint of Nominality

研究代表者

川島 拓馬（KAWASHIMA, Takuma）

富山大学・学術研究部人文科学系・講師

研究者番号：50879666

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日本語の接続形式を対象に、歴史的観点から考察を行ったものである。研究成果としては、接続詞「そのくせ」の変遷について明らかにし、「くせに」と異なる点やその理由について述べた。次いで現代語の「限り」の用法を区分する観点について提案を行い、歴史的研究への足がかりとした。また文法形式と文章ジャンルの関係性について検討を行い、文法研究の精緻化にはジャンルへの注目が重要となることを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、現代日本語に見られる形式について、それがどのようにして成立し、どのような変遷を経て現在の姿へと至ったのかを明らかにしようとするものである。従って、現代日本語の特徴をより良く理解することへと繋がるものだと考えられる。これは、歴史的研究の意義を強調するものである。更に、文法研究と文章・文体論との接点を探ろうとする試みは近年注目されているが、歴史的研究においてもその重要性を示している点は学術的意義があると言えるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study was conducted on Japanese conjunctive forms from a historical perspective. As research results, I clarified the transition of the conjunction "Sonokuse," and described the points where it differs from "kareni" and the reasons why it differs from "kareni." Next, I proposed a viewpoint for classifying the usage of "kagiri" in modern Japanese, and provided a clue for historical research. In addition, I examined the relationship between grammatical form and writing style, and it was pointed out that attention to style is important for the elaboration of grammatical research.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史 文法史 名詞 仮定条件 文法化

## 1. 研究開始当初の背景

日本語の歴史においては、名詞の機能語化と呼ばれる現象が指摘され、通時的な研究が盛んに行われている。これにより日本語史上の大きな変化について多数の有意義な知見が得られているが、一方で、以下のような点がなお課題として残されている。

(1) a. 名詞の持つ語彙的な意味と、変化の要因や過程とはどのような関係にあるか。

b. 歴史上、特に明治期以降に名詞要素を含む形式が増加している背景は何か。

(1a)については、当該の名詞の意味が変化のあり方やその背景にどう関与しているかという問題であり、これを考察することで、言語の統語的側面と意味的側面の連関を捉えることが求められる。(1b)については、現代語において周辺のとされる形式は比較的最近になって出現したものであり、現代語へと連なるものとして日本語の歴史を捉える上では重要となる問題である。これまで歴史的な成立過程が明らかにされてこなかった形式に対しても、なぜこのような形式が要請されたか、機能語へと変化するパターンにはどのようなものがあるのかを問うことが求められる。

## 2. 研究の目的

上記の問題提起を受け、本研究では以下のような目的を設定する。

(2) a. 共時的実態の把握を前提として、接続形式の成立および変遷の過程を明らかにする。

b. 接続形式の変化のあり方を捉え、近代期の文章の特徴との関わりについて考察する。

(2a)は、具体的な形式の変遷過程を考える際、現代語における様相についても調査を行う。これは、歴史的観点からの研究が有効となるような論点を設定するためのものであり、そのために内省の利く現代語を利用する。(2b)は、明らかになった事実から変化の方向性を見出し、機能語化の様々な事例と照らし合わせることで、接続形式における変化の特質を解明するものである。更に、文章のジャンルによる比較を行った上で、文法に関わる変化と文体的特徴がどのように関係するかについて考察を進めていく。

## 3. 研究の方法

本研究では、接続形式の中でも仮定条件を表す「限り」「場合」の2形式を対象とする。これらは公的な文体との親和性の高い表現であり、近代という時代に特徴的な表現を取り上げようとする意図によって選定したものである。

まず用法の区分の仕方を把握するため、対象とする形式の現代語の実態についてコーパスを用いて調査する。次いで、主として近代以降に出現する新聞・演説・論説文等の資料から用例を収集し、変化の様相を捉える。その際、現代語を比較対象とすることで、現代語には存在する用法が欠けている、現代語では容認されない用例が見られる、用法の比率の多寡が現代語とは異なる、といった点に注目しやすくなり、より詳細な分析が可能となる。分析にあたっては、当該形式の前や後にどのような表現が現れるかといった形態的な側面を手掛かりに、どのようなものが仮定条件を表すかといった意味的な側面へと考察を進めていく。

## 4. 研究成果

本研究の成果は、以下 ~ に示す論文および図書3件によって公表を行った。

現代語の「限り」について考察を行い、歴史的研究のための基盤とした。「限り」の用法については幾つかの先行研究が見られるもののその区分においては混乱が生じていたため、語としての「意味」と当該文における文法的機能としての「用法」とを区別し、整理を行った。結論として、「限り」は何らかの点で「範囲」を表すものであり、その用法として程度数量用法と因果関係用法とに分けられることを主張した。「限り」の後件との関係性から、前者は程度修飾と数量修飾、後者は仮定条件と原因・理由とに区分できること、またそれぞれ用法の関係性についても述べた。

自身が以前に行った接続助詞「くせに」の変遷に関する研究を補うものとして、「そのくせ」についても論じた。近世前期の「そのくせに」の用例を考察することで、「くせに」および「そのくせに」の変遷過程に、「ある主体に対して、前件と後件の事態がともに生じている」という段階があったことを指摘した。近世後期以降の展開としては、逆接と累加の用法が同程度に見られたが、近代になると「くせに」の影響を受け累加の用法が縮小していることを述べた。また「そのくせ」に「くせに」にはない累加の用法が見られることについて、前件が指示詞「その」であることとの関連性を指摘した。

文法形式と文章ジャンルの問題に関連して、種々の先行研究を踏まえ、どのような問題設定が可能か、どのように両者の関係性を明らかにしていくかに関して考察を行った。また本研究とも関連する、歴史的研究におけるジャンルの重要性と可能性についても併せて検討を行った。近代以降に多く見られる形式には、公的な資料との親和性が高いものが見受けられるが、そうした傾向性を考える上でもこのような論点は重要と言える。これらの考察に加え、具体的な事例として、代表者が以前に論じた「模様だ」を取り上げて、「模様だ」が新聞意外にブログにも多く出現すること、ブログにおける「模様だ」の特徴やそうした用例が出現する背景についても述べた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 川島拓馬	4. 巻 78
2. 論文標題 現代日本語における「限り」の意味・用法	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文藝言語研究	6. 最初と最後の頁 25-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川島拓馬	4. 巻 79
2. 論文標題 接続詞「そのくせ」の歴史的変遷	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文藝言語研究	6. 最初と最後の頁 51-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 富山大学人文学部編，川島拓馬（ほか6名）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 桂書房	5. 総ページ数 89
3. 書名 富山大学人文学部叢書 人文知のカレイドスコープ（「ことばの使われる「場」 文章ジャンルと文法形式」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------